

# 旅と文学—チェーホフ『シベリアの旅』と太宰治『津軽』 を中心に

## ウッセン ボタゴズ

«Еду я совершенно уверенный, что моя поездка  
не даст ценного вклада ни в литературу, ни в науку:  
не хватит на это ни знаний, ни времени, ни претензий.»

А.П.Чехов, из письма Суворину от 9.03.1890

私はこのたびの旅行で見て来た町村[...]に就いて、  
専門家みたいな知つたかぶりの意見は避けたいと思ふ。

私がそれを言つたところで、所詮は、  
一夜勉強の恥づかしい軽薄の鍍金<sup>めっき</sup>である。

太宰治『津軽』

### はじめに

チェーホフの作品が日本に初めて紹介されたのは、彼がまだ生きていた頃、明治35年である。すなわち1902年11月17日、大阪朝日新聞にロバート・ロングの「アントン・チェーホフ」というエッセーの翻訳が掲載されたのを初めとするが、このエッセーは著者がイギリス人に「チェーホフを読むべし」というメッセージを込めたものであった。長編の大家トルストイあるいはドストエフスキーとは違って、簡潔な文章と凝った風刺が目立つチェーホフは日本で直ちに高く評価され、彼の文学は肯定的に受容されていった。

チェーホフが登場した明治時代から今日に至るまで、彼の文学は日本の作家たちに大きな影響を与えてきた。昭和期の井伏鱒二、菊池寛、太宰治をはじめ、現代の村上春樹まで、日本の作家たちはチェーホフとチェーホフの文学について直接的、間接的に言及し、限りないオマージュを捧げ続けている。なかでも太宰治は、終生チェーホフを崇めつつ、彼の複数の作品をそのままモデルにした日本の作家として特別な位置を占めているといえるだろう。「チェホフを澤山読んでみなさい。さうして、それを真似してみなさい」<sup>1</sup>と提唱していたことから、チェーホフの文学が太宰に多大な刺激をもたらしたことがわかる。

太宰治のチェーホフ受容、また両作家の接点については、これまでも柳富子の論考をはじめとする多くの先行研究がみられる。とりわけ柳富子の「チェーホフ——明治・大正の

紹介・翻訳を中心に」(1976)、『斜陽』について——太宰治のチェーホフ受容を中心に」(1970)が注目に値する。前者は日本におけるチェーホフ文学の受容とその歴史的背景を精緻に分析したものであり、後者は『斜陽』を『桜の園』のみならず、『かもめ』にも関連付けて考察する斬新な論考である。

太宰治とチェーホフの比較研究におけるもう一つの主要な論文は東郷克美の「太宰治とチェーホフ——『斜陽』の成立を中心に」(1972)である。この論文では、太宰治がチェーホフから受けた多大な影響や『桜の園』と『斜陽』の共通点、また貴族の没落及び新制度を目指す革命などといった両作品の題材の繋がりが示されている。また、高橋秀太郎は「チェーホフと太宰治」(2013)で短編小説家としてのチェーホフに着目し、シエストフのチェーホフ批評と日本のチェーホフ像の関係、太宰のチェーホフ文学の受容、とりわけ彼の短編小説への関心について論じている。他にも、山崎正純、井桁貞義、中村雄二郎らのチェーホフ論及び日本におけるチェーホフ文学の影響に関する論考が興味深く、注目に値する。

太宰治とチェーホフの関係性はこのように多くの研究者によって論じられてきたが、両作家の文学の比較、また太宰のチェーホフ受容にはいまだ検討の余地がある。両者の比較研究においてこれまで検討されてこなかった一つの重要な点は、太宰の故郷津軽とチェーホフの関係性である。太宰は『津軽地方とチエホフ』というエッセイの中で津軽地方をチェーホフの劇で描かれるロシアの田舎に喩えているが、なぜ津軽がチェーホフの劇を連想させたか、そしてこの比喩は太宰にとってのチェーホフの世界観をどのように反映しているのか、といったことが検討すべき課題として残されているのだ。

## 1. なぜ『シベリアの旅』と『津軽』を比較しなければならないのか？

1946年に『津軽地方とチエホフ』というエッセイの中で太宰は次のように書いている。「いま私は、戦災のため田舎暮らしを餘儀なくされてゐるが、ちやうどいまの日本の津軽地方の生活が、そつくりチエホフ劇だと言つてよいやうな氣さへした」<sup>2</sup>。また、同年の貴司山治宛の手紙で「ゆうべチエホフのシベリア紀行を讀んで、出て来る人物が、あんまりこの津軽地方の住民に似ているので、溜息が出ました」<sup>3</sup>と述べている。太宰のチェーホフ受容における津軽の役割について、確かにこれまでも指摘されてきた。例えば東郷克実は、太宰治におけるチェーホフ体験は彼が津軽で味わった敗戦体験と重なっており、「津軽疎開中にチェーホフの作品が彼の創作エネルギーになっていった」<sup>4</sup>と主張している。

しかし、言うまでもなく太宰の人生で津軽地方は「避難所」という唯一の役割に留まっていなかったし、また太宰とチェーホフの関係における津軽はチェーホフへの関心をより強く寄せた「場所」という簡単な機能に限られてもいなかった。津軽地方は太宰の人生とともに文学活動に多面的な影響を与え、またチェーホフとの関係においても様々な解釈を可能にする。第一に、太宰が『津軽地方とチエホフ』で『桜の園』の主人公のようにインテリゲンチアを批判することは、津軽とチェーホフの関係性の背後に敗戦という絶望的な雰囲気とインテ

リゲンチアの無関心、また太宰のこのような社会情勢への敏感さがあることを示している。第二に、津軽地方とチェーホフの関係性を、チェーホフが描いたロシア、とりわけシベリア地方と津軽の類似性というより広い意味で検討することができる。最後に、シベリアと津軽はチェーホフと太宰がそれぞれ目指した「旅の目的地」という意味で繋がっており、このような繋がりは両作家の文学を「旅」というテーマからあらたに考察することを可能にする。

さて、なぜ太宰はチェーホフの戯曲で描かれる田舎生活を津軽に喩え、具体的には津軽のどのようなところが太宰に「チェーホフ的な」ロシアを思い出させたのだろうか？ この問題が検討されてこなかった一つの理由は恐らくチェーホフと太宰の比較では、影響関係が重視されるからであろう。たしかに太宰はチェーホフのサハリンへの旅について未知ではなかったはずである。しかし、太宰が『津軽』の執筆にあたって『シベリアの旅』をモデルにした、あるいはチェーホフの影響で旅することに刺激されたとは言い難い。「ゆうべチェーホフのシベリア紀行を読んだ」ことについて太宰は1946年5月、つまり津軽への旅のちょうど2年後に言及している。このことから、『津軽』は『シベリアの旅』をモデルにしておらず、独立的に創作された作品であることがわかる。

しかし、影響関係がないことは両作品の比較を妨げるものではなく、かえって偶発的な関係性がより興味深い比較を可能にするのではないだろうか。また、このような偶然の関係性に初めて気づいたのは太宰自身であること、そして本人が両作品の類似性に「溜息が出るほど」驚いたことは、『シベリアの旅』と『津軽』の比較の魅力をさらに高めているだろう。

## 2. 太宰の故郷津軽

津軽とチェーホフの関係を検討する前に、まず太宰が体験した「津軽」の様々な形を分類して論じる必要がある。つまり太宰にとって津軽という地方は、故郷、旅の目的地、そして避難所という三つの形で存在したことを考慮に入れるべきである。太宰は若いころから生家を去って、来京したが、津軽は彼の人生の中で様々な形で現れ続けていた。浮き沈みの激しい家族関係が彼の生家および故郷という津軽のイメージに大きく影響を与えたが、これ以外にも津軽は、1944年5月12日から6月5日にかけて太宰にとって貴重な旅の目的地であったし、戦時中には避難所、戦後は「敗戦」という<sup>おぞ</sup>ましい状況のシンボルとなったのだ。

故郷としての津軽、そして「故郷」そのものは、太宰の文学において重要な役割を果たしたということはしばしば指摘される。しかし、太宰の故郷に対する感情はとても複雑で、愛憎の絡み合った家族関係のように疎遠さと親密さの間で猛烈に変動していた。とはいえ、故郷へのこのような猛烈な情緒はむしろ彼の文学を特色付けて、創作の原動力ともなっていた。このことについて太宰はちょうど没前1947年に『わが半生を語る』というエッセイの中で次のように述べている。

私は殆ど他人には満足に口もきけないほどの弱い性格で、従って生活力も零に近

いと自覚して、幼少より今迄すごして来ました。ですから私はむしろ厭世主義といってもいいようなもので、余り生きることには張合いを感じない。ただもう一刻も早くこの生活の恐怖から逃げ出したい。この世の中からおさらばしたいといふやうなことばかり、子供の頃から考へている質でした。

かういふ私の性格が私を文學に志さしめた動機となつたと云へるでせう。育つた家庭とか肉親とか或ひは故郷といふ概念、さういふものがひどく抜き難く根ざしてゐるやうな気がします。<sup>5</sup>

ここで注意すべき点は、太宰にとって「故郷」が地理的な環境あるいは自分が囲まれ成長した「自然」というよりも、主に「家庭」および「肉親」といった概念と強く結びついていたことである。相馬正一の指摘によれば、太宰にとって故郷とは津島家そのものであり、「津軽の中では津島家ゆかりの人々の住むところ以外に」太宰は興味を持たなかった。そして、太宰にとっての故郷は津軽の独特の自然と風土から生まれた心像ではなく、津島家という「人工的に」造られた特殊な環境の中で形成された「生家」のイメージから由来したものであるという<sup>6</sup>。また、「故郷」に自分の文学と自分自身を認めてもらいたいという太宰の要望が彼の故郷意識を考察する際によく指摘されるが、これも両親の没後津島家を守っていた長兄、そして葛藤と和解の間で揺らいでいた二人の複雑な関係が背景にあると考えられる。

このことから、太宰が津軽への旅によって故郷を初めて「自然」として受け取ったのではないかという予測が浮かぶかもしれないが、しかし旅の後にも太宰の故郷意識は「家族」、あるいはより一般的に「人間」との関係の枠組みで存在し続け、終生変わらずに一定したものであったことを忘れてはならない。そうであるなら、この旅は家族から除外された太宰の肉親との再会、あるいは疎遠になった関係の再構築をもたらしたセンチメンタルな旅となったのではないかというまた別の予測が現れるかもしれないが、しかし太宰の家族との久しぶりの再会と関係の再生は旅の前、1941年に彼が10年ぶりに初めて実家に帰った時すでになされていたことがよく知られている。

さて、津軽旅は故郷の自然の再発見でもなく、家族との再会でもなければ、何だったのか。このことを考える際に、まず太宰が小山書店から津軽地方の風土記を依頼され、それに必要な取材および情報を集めるために津軽に出かけたことを考慮に入れるべきである。『津軽』の序編に太宰は次の通り書いている——「或るとしの春、私は、生れてはじめて本州北端、津軽半島を凡そ三週間ほどかかつて一周したのであるが、それは、私の三十幾年の生涯に於いて、かなり重要な事件の一つであつた。私は津軽に生れ、さうして二十年間、津軽に於いて育ちながら、金木、五所川原、青森、弘前、浅蟲、大鰐、それだけの町を見ただけで、その他の町村に就いては少しも知るところが無かつたのである」<sup>7</sup>。そして、太宰は津軽の独特の自然と津軽人の特性に対して決して無関心ではなく、作品の中で津軽の地理的、民族的及び歴史的な特徴について確かに幅広く言及している。しかしこのような学問的な情報を自分の関心よりも、ただ読者の要求を満たすために「専門家みtainな知ったかぶり」をしなが

補足しているような印象を与える。太宰は自分の旅における目的を『津軽』の冒頭ではっきりと示している。「私には、また別の専門科目があるのだ。世人は假にの科目を愛と呼んでゐる。人の心と人の心の觸れ合ひを研究する科目である。私はこのたびの旅行に於いて、主としてこの一科目を迫及した」(24)。つまり、太宰が津軽旅で目指したのは故郷を取り戻すこと、あるいは家族との関係を作り直すことではなく、「愛」という複雑なものを再定義し、「愛」という枠組みの中で津軽地方の現状を語ることであったのだ。

太宰は「私は或る出版社から旅費をもらひ、津軽旅行を企てた。その頃日本では、南方へ南方へと、皆の關心がもつばらその方面にばかり集中せられてゐたのであるが、私はその正反對の本州の北端に向つて旅立つた」と書き、旅の目的は「いまのうちに自分の生れて育つた津軽を、よく見て置く」ことであると主張する<sup>8</sup>。そして、1944年の5月1日に「ジャンパーを着てきちんとゲートルを巻いて戦時型の軽装をして、リュックサックを背負って」<sup>9</sup>東京を出発する。太宰治は津軽を次のルートで旅する。青森、蟹田(中村貞次郎宅)、三厩、竜飛、蟹田(中村宅)、金木(生家)、五所川原、木造、深浦、鯨ヶ沢経由、五所川原、小泊、蟹田(中村宅)。同年11月にこの旅の出発点であった『津軽』が「新風土記叢書7」として小山書店から刊行される。太宰は津軽旅によって得られた経験と成果、そして長い間に自分の心で抑えてきた津軽気質について1946年に『十五年間』の中で次のように語っている。

私は、自分の血の中の純粹の津軽気質に、自信に似たものを感じて歸京したのである。つまり私は、津軽には文化なんてものは無く、したがつて、津軽人の私も少しも文化人では無かつたといふ事を發見してせいせいしたのである。それ以後の私の作品は、少し變つたやうな氣がする。私は「津軽」といふ旅行記みみたいな長編小説を發表した。その次には「新釋諸国噺」といふ短篇集を出版した。さうして、その次に、「惜別」といふ魯迅の日本留學時代の事を題材にした長篇と、「お伽草子」といふ短篇集を作り上げた。その時に死んでも、私は日本の作家としてかなり仕事を残したと言はれてもいいと思つた。<sup>10</sup>

### 3. チューホフと *Mania Sachalinosa*<sup>11</sup>

1890年にチューホフがサハリン島に行く途中で『シベリアの旅』という紀行文をスヴォーリンに送付する。この旅行記はそのまま雑誌『ノヴォエ・ヴレミヤ』で掲載され、チューホフの大旅行が当時のロシアで大きな反響を呼び起こす。チューホフがシベリアを通過したのはシベリア鉄道がまだ建設されていなかった頃である。彼は当時多くの人、特にインテリゲンチアが自発的に行きそうな地方ではなかったシベリア、そして行った者は誰も帰ってこぬ地域を馬車で通過し、後に地獄の島と見なされたサハリンに3ヶ月も滞在する。このような旅は当時のロシアで異例なこととして、そして同時に誠にヒロイックな行為として注目を浴びた。

シベリアとサハリンを旅するというチューホフの決心を導いた動機は、いまだに不明瞭であ

る。そして、チャーホフがサハリンを旅した目的について、一貫した論考はいまだに立てられていない。言うまでもなく、この旅は非常に危険であった。肺結核にかかっていたチャーホフはこのような冒険のリスクを十分に意識していたはずである。にもかかわらず、チャーホフは9000キロの距離を克服して、そのうちの4000キロを馬車で走って81日間後サハリンに到着する。チャーホフ自身がサハリンを旅する動機について多少言及しているが、しかし彼のサハリンに対する言及は矛盾に満ちており、場合によって対立的な面も持つ。まず、1890年3月9日の有名な手紙でチャーホフは、誰しも興味を持たないところに行く意味などないのではないかと書いたスヴォーリンに対して、「サハリンは自由意志で住む人間と自由を剥奪された人間にのみ辛うじて堪えられる苦難の場所です」と書き、より多くの人が行く先として訪ねるべきである、とサハリンという場所を熱烈に擁護している。この手紙はチャーホフのサハリン旅におけるヒューマニスティックな目的の証拠としてしばしばみなされてきた。しかし、同年のまた別の手紙で、チャーホフはフィリポフに次のように書いている。「ぼくは実はサハリンに囚人のためだけに行っているわけではない。なんとなく行きたいから。人生の1年か1年半を棄てたい」<sup>12</sup>。チャーホフのこの言及はサハリン旅が社会的な貢献よりも内的なニーズ、実存主義的な危機からの脱出であったことの証明としてしばしば引用される。

チャーホフがサハリンに行く前に、彼の人生でこのような大旅行への決心と関連付けられるいくつかの重要な出来事が起こった。まず、1885-1886年にチャーホフは修士課程を得るため、「ロシアの医学史」という研究テーマを設定するが、このことは彼のサハリンに対する学問的な関心の元となったとよく指摘される。そして1888年にチャーホフは短編集『たそがれに』でプーシキン賞を受賞し、翌1889年には『退屈な話』という短編小説を発表する。本格的な作家として初めて評価されたチャーホフは、ユーモア短編を捨て、より深い文学に携わるプレッシャーが高まった。その結果、より価値のある作品を残すという彼の野心が刺激され、この狙いがサハリン旅に行く動機を与えたと推測される。また、『退屈な話』でチャーホフが死に近づいてきたある老教授について書いているが、この小説はチャーホフ自身の実存主義的な危機から生まれたものとして解釈される。つまり、『退屈な話』はチャーホフ自身が肺結核にかかっていたことを意識して、死の恐れを感じつつ執筆したものであり、チャーホフは危険なサハリン旅に自分自身を試すべく出たことを示す作品であると指摘される。最後に、1890年にアルコール依存症と肺結核でチャーホフの兄ニコライが亡くなるが、この悲劇的な事態はチャーホフの憂鬱を悪化させ、彼のサハリンへの脱出に繋がったという論もある。

このように、チャーホフのサハリン旅の背後には学問的な関心もあれば、文学活動に対する不安や実存主義的な危機もある。なぜ旅の目的地としてまるで「地獄」のような危険なところを旅したかという疑問に、精神的なインスピレーションを得るため、肺結核の悪化で死の恐れを感じ、自分自身を試すためなど様々な理由があげられているのだ。最後に、無論チャーホフが囚人について貴重な資料を残すため、ロシアの法律学に貢献するためサハリン島に旅したという現実的な理由も見逃してはならない。しかし、外的なプレッシャーにせよ、内的な要望にせよ、いずれにしても、チャーホフがサハリンに夢中になり、旅する衝動に駆られたこ

とに疑いの余地はない。チャーホフ自身がこの衝動を「Mania Sachalinosa」と呼び、サハリンという病気にかかったことをふざけながら認めているのだ。

チャーホフのサハリンまでのルートは次の通りであった。ヤロスラヴリ、ニジニノヴゴロド、エカテリブルク、チュメニ、トムスク、アチンスク、クラスノヤルスク、イルクーツク、ブラゴヴェシエンスク、ニコラエフスク、サハリン。「チュメニからイルクーツクまで馬車で3000ベルスタ以上も走った」<sup>13</sup>と書いたチャーホフは、この馬車での冒険をまもなく『シベリアの旅』で生々しく描き残す。『シベリアの旅』をちょうど旅中に創作したチャーホフは自分のシベリア経験を新鮮に描写し、そのままスヴォーリンに送る。スヴォーリンがチャーホフの紀行文を『ノヴォエ・ヴレミヤ』で掲載した瞬間にチャーホフは英雄のように注目を浴びる。この作品は当時チャーホフの大旅行に期待を寄せていた多くの人々の好奇心を満足させるような報告書となったし、また広い意味でシベリアの悲しい事情を世間に知らせた貴重な作品ともなったのだ。チャーホフが1890年12月にモスクワに帰ってきてまもなく、大旅の中で得た印象、そしてサハリンでの滞在経験に改めて感動しながら、強い気持ちで次のように伝えている。

サハリン島への旅と滞在については、たとえどんなに短くしても、終わりのない長い話になるので、ここでは省略します。ただ一つ言っておきたいのは、僕は大満足で、心の底から魅了されきっていて、もう何も要りません。もし、脳卒中で倒れたり、赤痢であの世に旅立ったりしても憤慨しません。やっぱり、経験が生きたな！これで結構です。僕はサハリンという地獄にもいたし、セイロンという天国にもいた。(1890年12月10日、レオンテヴ・シェグロヴ宛)<sup>14</sup>

#### 4. 『津軽』と『シベリアの旅』における偶発的な類似点

太宰の『津軽』は様々な面でチャーホフの『シベリアの旅』を思い出させる。ちなみに、津軽地方とシベリアを関連付けて言及したのは太宰だけではなく、たとえば太宰の門人であった小山清(1911-1965)はのちに自らも津軽への旅をした際、ロシアとの類似性について次のように述べている。

津軽人の良質を、文芸の世界に於いて、見事に開花させたのが、太宰治である。太宰文学には、津軽気質の粋の粋なるものの結晶がある。太宰文学というものが、津軽以外の風土からは決して生まれないものであることを、私はこんど旅行中に確かめた。[...]私には津軽気質というものが、なんとなくロシア気質に似ているように思われる。ここにいうロシア気質とは、ドストエフスキイ、トルストイ、チャーホフなどの十九世紀ロシア文学をとおして私達が馴染になっている、ロシア人の民族性のことである。私には津軽人にはなんだかロシア人を小型にしたようなところがあるように思われる。<sup>15</sup>

実際、『シベリアの旅』と『津軽』を対比して読んでみると、両作品が偶然の一致に満ちていることがすぐに明らかになる。以下にそのいくつかの例を挙げてみた。

『シベリアの旅』

日暮れになると、大地は凍てついて、ぬかるみがそのまま地面のでこぼこに変わりはじめる。箱馬車は踊り跳ね、ごとごと音をたて、さまざまな悲鳴をあげる。寒い！人家もなければ行きあう人もいない…。<sup>16</sup>

わたしは半外套に深長靴、すっぽりと防寒帽をかぶっていたので、暗がり「旦那」とは見えなかったのだろう… (15)

痛さのあまり泣きさけぶのも、悲しくて泣くのも、助けを呼ぶのも、ただ人を呼ぶのも——ここではつまり吠えると言い、だからシベリアで吠えるのは熊だけではなく、雀や鼠も吠えるのだ。「猫につかまって、吠えてやがる」と、鼠のことを言う。(14)

さっきの土百姓があすまでに間にあわせることができたか、知りたいのだ。そんな短期間にいったい何ができるものか。[...]シベリアの役人たちは、生きている間に道路のよくなるのを見ることはないだろう。彼らにはこのままのほうがお気に召すのだし、苦情帳も、特派員の記事も、シベリア旅行者の批評も、修理に支出される資金と同じように、道路にはほとんど利益をもたらさない…。(57)

女性たちもここでは、シベリアの自然と同じように退屈だ。色どりに乏しく、よそよそしく、着飾りかたを知らず、歌をうたうでもなく笑うでもなく、かわいげがなく、

『津軽』

十七時三十分上野発の急行列車に乗つたのだが、夜のふけると共に、ひどく寒くなつて来た。[...]私は、東北の寒さを失念してゐた。(28)

乞食のやうな、といふ形容は、多分に主観的の意味で使用したのであるが、しかし、客観的に言つたつて、あまり立派な姿ではなかつた。(27)

私は津軽の津島のオズカスとして人に對した。(津島修治といふのは、私の生れた時からの戸籍名であつて、また、オズカスといふのは叔父糟といふ漢字でもあてはめたらいいのであろうか、三男坊や四男坊をいやしめて言ふ時に、この地方ではその言葉を使ふのである。)(39)

このやうな記録をあからさまに見せつけられ、哀愁を通り越して何か、わけのわからぬ憤怒さへ感ぜられて、「これは、いかん。」と言つた。「科學の世の中とか何とか偉さうな事を言つてたつて、こんな凶作を防ぐ法を百姓たちに教へてやる事も出来ないなんて、だらしがねえ。」(68)

岩木山の美しく見える土地には、米もよみのみり、美人も多いといふ傳説もあるさうだが、米のほうはともかく、この北津軽地方は、こんなにお山が綺麗に見えながら、

あるときわたしと話した古老の言いぐさで  
は「手ざわりが粗い」。(46)

美人のはうは、どうも、心細いやうに、私  
には見受けられたが、これは或ひは私の観  
察の浅薄なせみかも知れない。(120)

不利な自然的条件、寒さ、両作家の「旦那」に見えない格好、両地域の方言とその独特なことばの説明、そして未解決の大問題——シベリアの場合は「道路」であり、津軽の場合は「凶作」。両作家ともこの大問題にかかわる百姓たちへの共感に満ちているとともに、大いに褒め立てられてきた近代文明の偽善性、そして両地域が無視され続けてきたことへの憤慨を顕にしている。しかし、上記の例にも明らかなように両作家のそれぞれの地域に対する態度は完全に肯定的なものではなく、両地域の気候や現地の女性に関する言及のように、否定的な要素も盛り込まれている。ロシアの中心からロシアとさえ認められていなかった郊外「シベリア」に出かけたチェーホフと同様に、太宰も故郷という意識から離れ、津軽に対して強い違和感を示しているのだ。

## 5. 津軽とシベリアの人間

『津軽』と『シベリアの旅』を結びつけている一つの主要なテーマは「人間」である。両作品にも数多くの人物が登場し、語り手はこれらの人物を中心に様々な観察を行っている。両作品ともダイアログからはじまり、登場人物の描写で終わる。チェーホフは「囚人たちのために行く」と書き、太宰は「人の心と人の心の触れ合ひを研究する科目」を追及すると書いていたことから、そもそも両作家ともこの旅で目指したのは「人間」であったと言えるだろう。また、太宰自身も『シベリアの旅』を読んで「溜息が出るほど」驚いたのは、シベリア人と津軽人の類似性であったことから、恐らく両作家とも「人間」に焦点を当て、旅中で出会った様々な人物を作品の中心に置いていることがわかる。

人間といえば、両作家とも津軽とシベリア人の「粗野性」を主張し、現地の「粗い」人間についての記述が何度か現れる。太宰治の場合は、その「粗野性」が明らかに肯定的に捉えられ、作家自身の性質の一部として認められているが、チェーホフの場合は、シベリア人の粗野性が鋭くシニカルに描写されている。しかし、同時にチェーホフのシニシズムの背後にはシベリア人へのシンパシーが隠れているようにも感じられる。作家は盗難をしないシベリア人の「正直さ」について数回主張しているし、ある貴婦人の子供を貰って養育しているシベリアの女性の「親切さ」についても言及している。ちなみに、太宰は津軽人の粗野性を自分自身にも遺伝した性質のように捉えて、「私はたけの、そのやうに強くて不遠慮な愛情のあらはし方に接して、ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだい中で、私ひとり、粗野で、がらつばちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたといふ事に氣附いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をはつきり知らされた」(166)と『津軽』の結末でその性質について内省的に記述している。

ここで特記すべきことは、両作家ともこれらの地域の粗野な人達と彼らの粗野な仕事を自分たち「芸術家」という存在とその高尚な「芸術」という仕事に喩えていることである。『シベリアの旅』の最後のシーンでチェーホフは馬車を修理するシベリア人を芸術家に喩えながら、次のように書いている。

そしてそのときの御者の口ぶりや顔つきは、われわれが名高い芸術家たちについて話すときのことをまざまざと思いださせた。わたしの旅行馬車がこわれて、修理しなければならなかったのだが、御者の紹介で駅のわたしのところに現れたのは、神経質そうな身のこなしの、痩せぎすな青白い男で、どう見ても才人で、そのうぇ大酒飲みみらしかった。[...] 彼はさもぞんざいな、いやいやながらの仕事ぶりで、鉄のほうが彼の意志とは関係なく、さまざまな形をとって行くかのようだった。彼はしょっちゅうタバコをふかし、なんの必要もないのに鉄くずの山をほじくって、わたしがせきたてると、天を仰ぐのだった——芸術家たちも何か歌ってくれとか朗読してくれとか言われると、こういうふうにもったいぶるものだ。(63)

『津軽』の第三章で太宰は満州の兵隊たち向けのある雑誌に短編小説を送付するように約束したことについて述べている。締切が迫ってきたので、太宰は津軽旅中にその短編を書き上げなければならなくなる。太宰が二日間 N 君の家に引きこもって短編を書いているうちに N 君は精米工場で働く。そのシーンが以下のように描かれている。

「書けたかね。僕のはうは、もう少しだ。このごろは機械の調子もいいんだ。君は、まだうちの工場を見た事が無いだらう。汚い工場だよ。見ないほうがいいかも知れない。まあ、精を出さう。僕は工場のはうにゐるからね。」と言つて歸つて行くのである。鈍感な私も、やつと、その時、氣がついた。N 君は私に、工場で働いてゐる彼の甲斐甲斐しい姿を見せたいのに違ひない。もうすぐ彼の仕事が終るから、終らないうちに見に来い、といふ謎であつたのだ。私はそれに氣が附いて微笑した。いそいで仕事を片付け、私は、道路を隔て別棟になつてゐる精米工場に出かけた。N 君は繼ぎはぎだらけのコール天の上衣を着て、目まぐるしく廻轉する巨大な精米機の傍に、両腕をうしろにまはし、仔細らしい顔をして立つてゐた。

「さかんだね。」と私は大聲で言つた。(60)

これらのシーンの背後に両作家のシベリアと津軽人の生活と彼らの「仕事」に対する尊敬が読み取れる。自分なりに何かを作ろうとする田舎者の熱心さや強い意志に両作家とも感動しているように思われる。そして、恐らく郊外や中心、高尚な芸術や粗野な仕事であれ、人間は人間として同じ野心を抱き、自分の「作ったもの」を認めてもらうために同じように振舞うということも示唆されている。しかし、このような「高尚な」世界と「粗野な」世界の間に

「文明」という一つの大きな差があり、両作家ともそれを意識しているように見える。両作家とも文化、あるいは文明の面で見られる両地域の退廃に焦点を与え、居住者の悲劇的な状態への敏感さを十分に表している。

例えば、『シベリアの旅』でピョートル・ペトロヴィチという人物のシベリア人の無学に関する批判が次のように書かれている。

ここのシベリアの人間どもは、無知無能でね。ロシアからは、半外套でも、更紗でも、食器でも、釘でもどしどし送ってくるってえのに、自分じゃ何ひとつできねえ。地面を耕すことと、自まえて御者をするよりほか、なんにもしねえ…。魚をとることさえできねえんで。退屈なやつらでさ、いやはや、なんとも退屈なやつらで！  
(37)

また、ヨーロッパの文明とシベリアの退廃に関するチェーホフの批判は以下の箇所でも明らかにしている。

こうして乗って行くのはつらい、じつにつらい。だが、このぶざまな、あばただらけの地の帯、このみにくいあばたが、ヨーロッパとシベリアを結ぶほとんど唯一の動脈だと思うと、いっそう心が重くなる！しかも、こういう動脈を通して、シベリアに文明が流れこむのだと人は言う！たしかに、人びとは言う、いろんなことを言う。だがそれをもし、御者なり、郵便夫なり、あるいはまたヨーロッパへ茶を送る荷馬車の列のかたわらで、膝までぬかるみにはまっている、ずぶ濡れで泥だらけの百姓なりが耳にしたとすれば、ヨーロッパについて、その誠意について、いったい彼らはどんな考えをいだくだろうか！(54)

これに対して、太宰はアウトサイダーとしての津軽人について次のように興味深く書いている。

津軽の奥の人たちには、本当のところは、歴史の自信といふものがないのだ。まるつきりないのだ。だから、矢鱈に肩をいからして、「かれは賤しきものなるぞ。」などと人の悪口ばかり言つて、傲慢な姿勢を執らざるを得なくなるのだ。あれが、津軽人の反骨となり、剛情となり、佞屈となり、さうして悲しい孤独の宿命を形成するといふ事になつたのかも知れない。(138)

申福貞は「越境する旅——太宰治『津軽』とチェーホフ『シベリアの旅』を中心に」で、チェーホフと太宰の旅を中心と郊外、文明と野蛮といった枠組みの中で考察し、次のように結論を出している。

両作品において「文明」の中心から周辺への旅が描かれているものの、実際ヨーロッパからアジアへの地理的な移動を伴う旅であった『シベリアの旅』に対し、『津軽』では、故郷の歴史をたどりながら故郷を語ることが、「満州」という空間を喚起するものとして故郷が描かれ、表現空間としての故郷津軽への旅が、単なる日本の中央から周辺への内なる旅にとどまらない空間を隔てた「越境」の旅であると言えるのである。[…]

「文明」からかけ離れた周辺の世界の遅れをありのままに受け入れながら、人間の自由と尊厳への追求が、チェーホフの旅であるとするならば、「満州」を喚起する空間として描かれた「私」の故郷への「巡礼」の旅は、故郷津軽にとどまらないアジアへの旅であると言えるだろう。両作品において、旅を通じてあらわれた後進的なものへのまなざしは、合理的な近代主義に対する違和感を示すものでもある。<sup>17</sup>

確かに、太宰は『津軽』で津軽の郊外としての疎遠さとそれに由来する津軽人の歴史的に弱い立場について触れ、チェーホフは文明的なヨーロッパとの架橋になっているシベリアのひどい状況とそれによって浮かび上がるアイロニーを描いている。両作家とも近代主義的な発展の圧倒的な影響がなぜかシベリアと津軽を回避したことに、確かに違和感を示している。しかし、違和感を示すのだが、両地域の将来に関しては積極的な態度を表明している。まず、両作家ともシベリアと津軽の後進的な状況に関して当局に責任があると感じ、その批判が数箇所で見られる。例えば太宰は、津軽で長いあいだ続いてきた凶作の歴史に憤慨し、科学の時代に凶作を防ぐ様々な方法があるはずなのに、百姓たちにそれを教えない当局を批判の対象としている。しかし、太宰は津軽に発展の見込みはきっとあると主張し、津軽の輝かしい将来について佐藤理学士の奥州産業総説から引用しながら、次のように言及している。

「それほど奥州の地は、産業に恵まれておないのであろうか。高速度を以て誇りとする第二十世紀の文明は、ひとり東北の地に到達しておないのであろうか。否、それは既に過去の奥州であつて、人もし現代の奥州に就いて語らんと欲すれば、まづ文藝復興直前のイタリヤに於いて見受けられたあの鬱勃たる擡頭力を、この奥州の地に認めなければならぬ。[...]そして改良また改善、牧畜、林業、漁業の日に日に盛大におもむく事を。まして況んや、住民の分布薄疎にして、將來の發展の餘裕、また大いにこの地にありといふに於いてをや」[...]まことに有難い祝辭で、思はず駆け寄つてお禮の握手でもしたくなるくらゐのものだ。(71)

一方、チェーホフは地理的な疎遠さ、そして激しい自然環境のため、シベリアがアウトサイダーのようにみなされていることを主張している。そして、シベリアに文明的な発展のかわりに、囚人や社会から除外された人々を送っている政府の無関心的な政策に不満を感じ、シ

ベリアの汚職で自分自身の得のみ考える事務官がいる限り、シベリアの道路も修理されないし、シベリア人や囚人の生活も改善されないだろうというように批判している。以下の箇所では、チャーホフが当時シベリアの状態を改善するために、まだまだ経験も足らず、知識も欠けていることを認めつつも、将来この状態のひどさは有り得ないこととしてみなされるだろう、と予測している。作家が最終的に、文明がシベリアにも肯定的な影響をもたらすと信じていることは明らかである。

わたしは信じて疑わない、五十年から百年もたってみれば、鼻の孔を引き裂いたり左手の指を切り落したりする刑罰が、いまのわれわれに与えるのと同じような当惑と嫌悪の情をもって、現代の刑罰の終身性をみるようになるだろうことを。なおわたしは信じて疑わない、たとえわれわれがどんなに心から、はっきりと、この刑罰の終身性のような時代おくれの現象が古くさく、偏見に満ちていることを認識したところで、われわれはこの不幸を救う何の力もないことを。この終身性を何かもっと合理的で、もっとふさわしい公正なものに変えるためには、現在のわれわれには知識も経験も足らず、したがって勇気も足りない。この面での優柔不断で一方的な試みはすべて、われわれを重大な誤りや極端へと導くにすぎないだろう——知識や経験にもとづかぬあらゆる新しい企ての運命はそうしたものだ。(43)

興味深いことに、両作家とも自らの旅に対して「巡礼」という言葉を使用している。先に示したチャーホフのスヴォーリン宛の有名な手紙で、彼はサハリンについて次のように述べている。「僕はもしセンチメンタルな人だったら、次のように言ったかもしれない。サハリンのようなところに我々は巡礼すべきだ。つまり、トルコ人がメッカに行くように。また、軍人がセヴァストーポリを崇めるように、水兵と刑務官がサハリンを崇めるべきだ」<sup>18</sup>。一方、太宰は旅と巡礼について詳しく言及していないが、『津軽』の第一章に「巡礼」という謎めいた題名をつけている。チャーホフがサハリン旅を巡礼と表現した理由は明らかであり、恐らく彼自身が同じ手紙で言及しているようにサハリンは人間の苦しみを象徴する苦難の場所であるからだ。チャーホフと違って太宰の場合は、津軽の神聖さはどのようなところにあったのか不明瞭である。自分が生まれた故郷をよく見ておくための巡礼なのか、それとも自分を育った人々に感謝を表すための巡礼なのか、明らかにされていない。いずれにせよ、両作家が旅について同じく「巡礼」と表現していることは、恐らくこれらの旅で「娯楽」、あるいは創造的な刺激だけではなく、不便さ、危険さ、苦痛などといったつらい経験も目指されたことを証明しているのだ。

## 6. 旅におけるパラドックス

『津軽』と『シベリアの旅』は地域の自然や地理的な特徴を中心にする紀行文でありながらも、両作家とも第一に人間を重視していることについてすでに述べた。ここでは、両作家とも

旅中出会った人間、あるいは観察した人間によって、大旅に刺激された自分自身の目的をさらに確認できたことを特記しておきたい。また、作品の結末で両作家とも打ち明けている自己反省はこの旅によって得られた成果の一つであることも注目に値する。さて、チャーホフと太宰はシベリアと津軽への旅で何を目指し、何を得られたのだろうか？

結論から言うと、チャーホフがシベリアで「自由」の意味を探し、太宰は津軽で「愛」の再定義を目指した。そして、興味深いことに両作家の大旅への刺激、そして「旅」で目指したことは、その行き先の地域と逆説的な関係にある。つまり、チャーホフはロシアの「最低」の人間、社会的な余計者が投獄されている「不自由な」シベリアで「自由」を追究し、太宰は自分自身が生まれた故郷津軽で人間の心を繋ぐ「愛」を、肉親ではなく、血縁関係のない、津島族に仕えた人間に求めるというパラドックスである。これらのことをより深く理解するため、両作品の冒頭と結末を比較してみる必要がある。

両作家とも作品の冒頭で、自分の気持ちについて言及し、二人とも悲しい、あるいは苦しい気分で旅に出ると明らかに言及している。これらの箇所を以下のように列挙してみた。

『シベリアの旅』

ひっそりとしたなかに急に聞きおぼえるの  
ある美しい旋律の鳴き声がひびきわたるの  
で、眼をあげると、さほど高くない頭上に  
ひとつがいの鶴が見えて、なぜか、ふっと  
うら悲しくなってくる。(10)

『津軽』

「ね、なぜ旅に出るの？」  
「苦しいからさ。」(26)

続いて、両作品の冒頭である人物が登場し、両作家ともその人物を中心にストーリーを展開させていく。『シベリアの旅』の冒頭でチャーホフが移住民のグループを見る。このグループの中で「ほかのものとはようすの違う」、「顎はきれいに剃って、白い口ひげを生やし、両脇には布にくるんだヴァイオリンを二つかかえている」ある男が作家の眼を奪う。チャーホフが、この男性の人生と彼が携わってきた「芸術」を痛烈な皮肉で描写し、彼のシベリアでの未来と彼が持っているヴァイオリンの運命を以下のように予言している。

いったい何者か、このヴァイオリンがどうしたものかは、きくまでもない。ふしだらで、ふまじめで、病身で、ひどい寒がり屋で、ウオトカにまんざらでもなく、臆病者で、生涯を彼は余計者、厄介者として、初めは父親、ついで兄貴のところまで生きながらえてきたのだ! [...] むこうに着けば、彼はシベリアの寒気にたちまちやられて、痩せおとろえ、黙って、だれにも気づかれずに死んで行く。むかしは郷里の村びとたちを浮きたたせたり沈ませたりしたヴァイオリンは、二束三文によそ者の書記か流刑囚かに売りとばされて、そのよそ者の子供たちが、絃を切ったり、駒を

折ったり、胴に水を入れたりする…。(12)

つまり、大旅に出たばかりのチェーホフはシベリアの景色とそこに生息する動物、またシベリアに移動した移住民のグループを眺めて「悲しく」なる。その移住民の中でなぜか「芸術」に携わる「病身」で「ふまじめな」男性がチェーホフの目を奪うが、彼の描写の背後に作家の絶望的な気分が感じられる。つまり、シベリアへ行く人は、たとえよりよい生活を築くために意図的に行く移住民でも、自由はおろうか、結局「死」あるいは「退廃」という一つの運命しかもたないという絶望である。

一方、太宰は『津軽』の冒頭で「苦しいから旅に行く」ということを主張し、若くして死んだ様々な作家の名前を出して、「作家にとつて、これくらいの年齢の時が、一ばん大事」(27)だと、ある意味で実存主義的な危機を仄めかしている。『津軽』の冒頭で登場する人物は昔津島家で鶏舎の世話をしていたT君である。T君も若い頃から津島家に仕えて、その後戦争に行き、病気にかかって、様々なつらい経験を乗り越えた人物である。太宰は彼の話聞いて、感動しながら、「僕は、しかし君を、親友だと思つてゐるんだぜ」と言うが、その余計さを認めながら「実に乱暴な、失敬な、いやみつたらしく気障つたらしい芝居気たつぷりの、思ひ上つた言葉である」(33)と反省する。太宰のこのような余計な言葉をT君も感じ取り、以下のように答える。

「それは、かへつて愉快ぢやないんです。」T君も敏感に察したやうである。「私は金木のあなたの家に仕へた者です。さうして、あなたは御主人です。さう思つてただかないと、私は、うれしくないんです。へんなものですね。あれから二十年も経つてみますけれども、いまでもしよつちゆう金木のあなたの家の夢を見ます。戦地でも見ました。鶏に餌をやる事を忘れた、しまつた! と思つて、はつと夢から醒める事があります。」(33)

二人の關係に「旦那」と「百姓」という明らかな差が未だに存在していることを太宰とT君はお互いを感じる。二人ともこの境界が永久に続いて、時代や社会にいかなる変更があつても、この階級意識は二人の間に存在し続けることに同意している。このシーンで太宰もチェーホフのように絶望に陥るが、しかし太宰の絶望は「愛の表現」にみられる。「私は言つてしまつて身悶えした。他に言ひかたが無いものか」(33)というように太宰がT君に自分の気持ちを上手く表現できず、自分とT君の間に存在する「境界」あるいは「旦那と百姓」のコンプレックスの削除に失敗して絶望するのである。

大旅の始まりに絶望する両作家は、しかし旅の最後に目指していたことを達成して、自己反省をする。つまり、チェーホフはシベリアでの自由を「タイガ」で発見するが、太宰は愛の再定義と愛の表現をたけという人物をとおして認識する。また、『シベリアの旅』の冒頭で登場する病弱で敗北者のヴァイオリン音楽家と違って、作品の結末で「才人」で自分の価値と重

大きさを十分に意識している鍛冶屋さんが登場する。チェーホフがやはりシベリアという郊外にも「大都会と同じように、これほど己の値打ちを知っていて、これほど気ままにふるまう才人」(63)がいるのだと反省する。これに対して、『津軽』の冒頭でT君と上手く表現できず、そして階級的な境界を越えられず、絶望に陥る太宰は最後にたけと出会って、彼女の「強くて不遠慮な愛情のあらはし方」こそ「愛の表現」であることを発見する。そして、このような不遠慮な愛の表し方が太宰自身の本質でもあることが明らかになる。

『シベリアの旅』

またこの密林地帯は、どれほどの秘密をかくしていることだろう！ほら、木々のあわいには脇みちやら少みちやらが忍びこみ、昼なお暗い森の奥へと消えている。いったいどこへ通じているのだろう。秘密の醸造場へか、警察署長も代議員も聞いたことのない村へか、それとも、浮浪者仲間が開いた金坑へか。この謎めいた小みちからは、なんとという向こうみずの、そそのかすような自由の息吹きがただよってくることだろう！(62)

『津軽』

次から次と矢継早に質問を發する。私はたけの、そのやうに強くて不遠慮な愛情のあらはし方に接して、ああ、私は、たけに似てゐるのだと思つた。きやうだい中で、私ひとり、粗野で、がらつばちのところがあるのは、この悲しい育ての親の影響だつたといふ事に氣附いた。私は、この時はじめて、私の育ちの本質をはつきり知らされた。私は斷じて、上品な育ちの男ではない。だうりで、金持ちの子供らしくないところがあつた。見よ、私の忘れ得ぬ人は、青森に於けるT君であり、五所川原に於ける中畑さんであり、金木に於けるアヤであり、さうして小泊に於けるたけである。アヤは現在も私の家に仕へてゐるが、他の人たちも、そのむかし一度は、私の家にゐた事がある人だ。私は、これらの人と友である。(167)

最後に、『シベリアの旅』と『津軽』の冒頭と結末に登場する人物と両作家のそれらの人物との関係を考えてみると、もう一つの類似点が浮き彫りになる。つまり、『シベリアの旅』で登場するふまじめで病者の音楽家と自信満々の鍛冶屋さんは二人ともチェーホフ自身の芸術家イメージを想起させ、ある意味で作家の運命が投影されているということである。先述した通り、ちょうどチェーホフがサハリン島に出かけたとき、彼はユーモア短編小説しか書かない「ふまじめな」作家というレッテルを捨てて、「純文学」での自分の立ち位置を探していた。チェーホフが芸術家として実存主義的な危機に陥ったからこそ、また「まじめで」貴重な作品を書きたがったからこそ、危険なサハリン旅に行ったということはしばしば指摘される。『シベリアの旅』の冒頭で登場する音楽家の描写はチェーホフ自身の人生を思い出させる。チェーホフもその音楽家のように、「ふしだらで、ふまじめで、病身で、臆病者で、生涯を彼は余計

者、厄介者として、初めは父親、ついで兄貴のところできながらえてきた」。結婚もしていないし、ヴァイオリンもただ娯楽のもので、彼のパフォーマンスはカバックや披露宴に留まっている。生計のため「ふまじめな」雑誌に短編を送っていたチェーホフ自身の初期文学活動を思い出させる。しかし、自信満々で、自分の才能を十分に意識している鍛冶屋さんの最後の描写には、チェーホフの自分の作家としての成功への皮肉な態度も感じられる。

ちょうどサハリン島に出る2年前の1888年に、チェーホフが作家として注目を浴び始め、プーシキン賞を受賞する。チェーホフが文壇で話題になったとき、彼自身はかなり驚いて、「運が良かった」とスヴォーリンに書いた。1888年10月10日に「いっそ机の下へ隠れて、ひっそりと、おとなしく、声を高めずに座っていきましょう。まじめな一歩を踏み出さないうちは、つまり長編を書かないうちは、わきのほうで静かにひっそりとおとなしくして、気取らずに小さな短編や小さな戯曲を書いて、あまり派手にやらず [...]」<sup>19</sup>と書いており、手紙を興味深いメタファで終わらせている。「Пока я маленький царек в своем муравейнике, украду сто рублей и убегу<sup>20</sup>」つまり「僕はまだ自分の蟻の巣のような小さな世界の小さなツアーリです。100ルブリを盗んで、逃げてしまいます」ということである。チェーホフの自分に向けられたアイロニーは、このような「静かに生きていく」という約束を破ってサハリン島に出かけ、よりまじめで、役に立つ資料を書き残すという野心へのアイロニーではないかと思われる。

一方、太宰は津軽への旅で探求していた愛の正しい表し方をたけによって見つけ、自分自身の粗野な津軽人としてのアイデンティティを再発見する。『津軽』の冒頭で太宰はT君との階級的な疎遠さに敏感であるが、最後にやはり自分も粗野の津軽人のひとりであり、津軽で出会った百姓たちはみんな友であり、忘れられない人たちであると告白している。太宰は最初、津軽に「自分の生れて育った津軽をよく見て置く」ために旅すると書いたが、結局この旅は太宰自身が育てられた「百姓たち」と再会し、長い間に納得できずに埋め込まれていた自分の「粗野な」本質を受け入れるための旅となったのだ。

ここでは、自分自身を表現し、時に自己を必要以上に押し付ける太宰は、『津軽』においても自分の「太宰物語」を続けていることを特記しておきたい。小説のクライマックスとなっている最後のシーン、つまりたけとの出会いはことごとく「太宰物語」から成り立っている。換言すれば、たけとの出会いはほとんどフィクションであり、『津軽』のセンチメンタリズムを深化するための虚構的な結末である。太宰は津軽でたけと確かに出会ったが、たけ自身の思い出によると、二人は話すことができず、『津軽』で描写されているシーンは実際になかったとのことである<sup>21</sup>。しかし、太宰は読者へのアピールという独特のスタイルで『津軽』を終わらせており、「私は虚飾を行はなかつた。読者をだましはしなかつた」と読者に訴えている。むしろ、自伝のこのような虚構化は珍しいことではなく、むしろ太宰の文学を特色付け、彼の独特の作風の一部であることを忘れてはならない。

太宰治は第三者を見つめるのではなく、「私」を対象とする私小説作家であった。それも、伝統的な私小説作家と違って、太宰は「私小説」と嘘、つまりフィクションを合併させ、私小説の「私」をメタ的に描いた。つまり、作家自身の「私」と他者の「私」を区別できなくな

人稱ドラマを創作し、小説に、作中で執筆している作家の姿と、太宰の自画像とを同時に挿入するという意味である。小説執筆中の作家を太宰治の自画像として読み取ろうとした瞬間に著者は突然「私＝太宰治」を登場させ、最終的に「私」と「語り手」、「私」と「太宰治」、「私」と「執筆中の作家」といったメタ的な人稱の結構を拵える。

太宰は「自分自身を読む、あるいは風景に託した自分を読み、そうした自分自身を表現した」<sup>22</sup> 作家であったからこそ、彼の小説群は主に自己を対象とする一つのグランド・ナラティブを枠組みにすると指摘される。つまり、太宰のそれぞれの小説は「オサム・サガ」<sup>23</sup> という彼が終生創っていた「大物語」の一部であり、太宰が自分の人生をネタにしつつ、小説でまた別の虚構的なダザイを描いたということである。という、『津軽』の虚構的な結末は「オサム・サガ」を続けるために必要であったことがわかる。しかし、作家太宰がわざと虚構的な自己を作ったからといって、自分の複数の自己を区別し、それらを意識的に使い分けたわけではない。そもそも太宰本人と虚構的なダザイの間にははっきりした境目がなく、著者の複数の自己を区別することは不可能であり、仮にそういう区別がされれば、太宰の文学とともに小説家としての性質に関する誤解を招きかねない。なぜなら、太宰の人生は太宰の文学であり、太宰の文学は彼の人生であったので、両者を切り離して考えることは不可能であるからだ。小説と現実を生きた多数の自己全てが太宰自身であったことを忘れてはならない。

## おわりに

チェーホフはブーニンとの対話で「自分の作品が読まれるのは、せいぜいあと七年、寿命はもっと短くて、あと六年だ」<sup>24</sup> と予測した。しかし、この予測は大きく外れ、チェーホフの作品は今日に至るまで 100 年以上も広く読まれ続けている。言うまでもなく、チェーホフは本格的な世界文学者であった。そして現在もそうであり続けている。とりわけ 1997 年から 2005 年まで出版された「チェーホフと世界文学」というシリーズはチェーホフ文学の普遍性を更に証明した。当シリーズでは西ヨーロッパだけではなく、東ヨーロッパやアジアを含めて、中国、日本、インド、そしてアフリカのようなあまり検討されてこなかった地域におけるチェーホフの文学の受容、その歴史と現状が観察されている。20 世紀のチェーホフ文学から新しい 21 世紀のチェーホフ文学への踏み込みという象徴的な意味を持つこのシリーズは、一つの興味深い点を明らかにした。つまり、チェーホフが多くの国でその国と国民の特性を持っている国民作家のように受容されているということである。具体例をあげると、チェコ人の意見では、「とにかくチェーホフはチェコ人であった」が、インド人にしてみれば「チェーホフはインドの作家であった」<sup>25</sup>。さらに、ロシア人の考えでは、チェーホフは「ロシアの本格的なヨーロッパ人」<sup>26</sup> であったが、日本人にしてみれば、チェーホフの文学は俳句のように短くて深いという特徴を持ち、チェーホフ自身は謙譲性、合理性といった東洋的な特性を持ったのだ<sup>27</sup>。チェーホフ文学のこのような多面的で多角的な受容は重要なことを表している。つまり、21 世紀の新しいチェーホフ文学はこれからも変化しつつ形成されていくものであるが、その重要

性は決して減ることなく、むしろ時代によって新しい意味をなしていくということである。

チェーホフの本質とチェーホフ文学の意味を探る議論はチェーホフの没後、現在にいたるまで盛んに行なわれている。とりわけ、チェーホフの素顔を明らかにする試みが、ながらく続けられてきた。チェーホフは短くて深い文章と鋭いユーモアの背後に自分の内面と素顔を上手く隠していた。書簡集であれ、個人的な日記であれ、チェーホフは意外にも多数のプライベートな資料を残している。しかし、これらの書物もチェーホフの文学のように、矛盾だらけのことばで書かれており、作家の意図が首尾一貫したかたちで表明されることがない。はっきり言ったような、言っていないような文章の性質はチェーホフの特質であったからだ。そして、いかなる国家でも国民作家のように受容されるチェーホフは、恐らく多面的な顔を持ち、多角的な文学を作り、残したのだ。さらに言うと、チェーホフの文学は時代や年齢を問わず、どんな国でも現地の文化や思想と順調に混ざり合って、どんなものにも変身できるプロテウスのように世界文学を支配し続けているのだ。

太宰治はチェーホフと違って、自分自身の人生と自画像を優先にした作家である。太宰の文学は自分自身を表現する文学であるとさえ指摘される。確かに、彼の作品の中で彼自身の自画像とは別に、自画像に基づいたまた別の「太宰治」という虚構的な像が登場し、このような多数の自画像の背後に、場合によっては「ナルシズム」の香りが漂ってくる。しかし、自分自身を必要以上に表現する太宰は、どう見ても「フィクション」を作ろうとしていたのだ。読者をだましはしなかったとよく書く太宰は、実のところ「作品」という虚構を周到につくりあげていた。また、太宰自身の個性がある一人の主人公ではなく、複数の登場人物に散在するので、作家自身の像はあくまでネタのように扱われていたのである。という、チェーホフも太宰も素顔を見せているようなふりを上手くした作家であったと結論できる。前者は自分自身をあまり表現せずに、謎めいた文章と矛盾だらけのことばしか残していないが、後者は必要以上に自己表現しつつ、多数の自画像の乱れによって結果的に自分の人生を虚構化していくことに留まっている。両作家ともフィクションの背後に自分の姿を巧みにくらすという意味で似ているのだ。

注

1. 太宰治「諸君の位置」『太宰治全集 第11巻』筑摩書房、1999年、191頁。以下、太宰の書簡や作品などからの引用に関しては同全集（1988-1999年刊）を用いるものとし、『太宰全集』と略記した上で巻数と頁数を記すこととする。
2. 『太宰全集 第11巻』310頁。
3. 『太宰全集 第12巻』365頁。
4. 東郷克美「太宰治とチェーホフ——斜陽の成立を中心に」『国文学解釈と鑑賞』37(12)、至文堂、1972年、81-86頁。
5. 『太宰全集 第11巻』324頁。強調は引用者。
6. 相馬正一「太宰治と津軽」75頁。
7. 太宰治『津軽』『太宰治全集 第8巻』、5頁。以下、『津軽』からの引用は同書により、ページ数を本文中に記す。
8. 太宰治『十五年間』、太宰治全集、第9巻、216頁。
9. 山内祥史『太宰治の年譜』大修館書店、東京、2012年、267頁。
10. 太宰治『十五年間』217頁。
11. 1890年2月15日のプレシエエヴ宛の手紙で、ちょうどサハリン旅のまえに準備をしていたチェーホフが使った表現。詳しくは本文を参照。
12. 邦訳は筆者による。「Я в самом деле еду на о. Сахалин, но не ради одних только арестантов, а так вообще... Хочется вычеркнуть из жизни год или полтора.» <http://feb-web.ru/feb/chekhov/texts/sp0/pi4/pi4-015-.htm>
13. 邦訳は筆者による。「От Тюмени до Иркутска я сделал на лошадях более трех тысяч верст.» <http://feb-web.ru/feb/chekhov/texts/sp0/pi4/pi4-101-.htm>
14. 邦訳は筆者による。<http://feb-web.ru/feb/chekhov/texts/sp0/pi4/pi4-143-.htm>
15. 相馬正一『太宰治と井伏鱒二』津軽書房、1972年、152頁。
16. チェーホフ『シベリアの旅』松下裕訳、筑摩書房、2009年、13ページ。以下、『シベリアの旅』からの引用は同書により、ページ数を本文中に記す。
17. 申福貞「越境する旅——太宰治『津軽』とチェーホフ『シベリアの旅』を中心に」『国語国文学研究』47、熊本大学、2012年、78頁。
18. 邦訳は筆者による。「Жалею, что я не сентиментален, а то я сказал бы, что в места, подобные Сахалину, мы должны ездить на поклонение, как турки ездят в Мекку, а моряки и тюрьмоведы должны глядеть, в частности, на Сахалин, как военные на Севастополь.» 9 марта 1890 г. <http://feb-web.ru/feb/chekhov/texts/sp0/pi4/pi4-0312.htm>
19. 『チェーホフ全集 第16巻』神西清、池田健太郎、原卓也訳、中央公論社1961年、83頁。
20. <http://feb-web.ru/feb/chekhov/texts/sp0/pi3/pi3-023-.htm>
21. 相馬正一『評伝太宰治 第2巻』、津軽書房、1995年、269頁。
22. 吉本隆明『太宰治を語る』大和書房、1988年、171頁。
23. Phyllis, I. Lyons. The Saga of Dazai Osamu: A Critical Study with Translations. Stanford: Stanford University Press, 1985.
24. イワン・ブーニン『呪われた日々／チェーホフのこと』佐藤祥子、尾家順子、利府佳名子訳、群像社、

2003年、242頁。

25. Катаев В.Б. Чехов в XX веке: Покорение Планеты //Чеховиана. Чехов: взгляд из XXI века. Ответственный ред. Катаев В.Б. Москва: Наука, 2011, стр.10.

26. Довлатов С.Д. Блеск и нищета русской литературы. <http://www.sergeidovlatov.com/books/blesk.html>.

27. Янаги Томико. Чехов в Японии // Литературное наследие. Чехов и Мировая Литература. Редакторы-составители, З.С. Паперный и Э.А. Полоцкая ; ответственный-редактор, Л.М. Розенблом. Москва: Наука 2005, стр.79.

#### 参考文献

申福貞「「越境」する旅——太宰治『津軽』とチェーホフ『シベリアの旅』を中心に」『国語国文学研究』47号、熊本大学、2012年、63-80頁。

相馬正一『太宰治と井伏鱒二』津軽書房、1972年。

——「太宰治と津軽」『国文学解釈と鑑賞』40(6)、至文堂、1975年、75-79頁。

——相馬正一『評伝太宰治 第2巻』、津軽書房、1995年。

太宰治『太宰治全集』筑摩書房、1988-1999年。

チェーホフ『シベリアの旅』松下裕訳、筑摩書房、2009年。

——『チェーホフ全集』神西清、池田健太郎、原卓也訳、中央公論社、1960-1961年。

東郷克美「太宰治とチェーホフ——斜陽の成立を中心に」『国文学解釈と鑑賞』37(12)、至文堂、1972年、81-86頁。

プーニン、イワン『呪われた日々／チェーホフのこと』佐藤祥子、尾家順子、利府佳名子訳、群像社、2003年。

三木清『シェストフ選集 第一巻』改造社、1934年。

山内祥史『太宰治の年譜』大修館書店、2012年。

山崎正純「太宰治におけるロシア文学の問題——プーシキンとチェーホフの持つ意味」『語文研究』58号、九州大学国語国文学会、1-15頁、1984年。

吉本隆明『太宰治を語る』大和書房、1988年。

A.П.Чехов. Энциклопедия. Составитель и научный редактор В.Б.Катаев. Москва: Просвещение 2011.

Катаев В.Б. Проза Чехова: проблемы интерпретации. Москва:Изд-во МГУ, 1979.

Литературное наследие. Чехов и Мировая Литература. Редакторы-составители, З.С. Паперный и Э.А. Полоцкая ; ответственный-редактор, Л.М. Розенблом. Москва: Наука 1997-2005.

Фундаментальная электронная библиотека. Русская литература и фольклор. <http://feb-web.ru/feb/chekhov/default.asp>

Чехов А. П. Полное собрание сочинений и писем в 30 томах. Москва: Наука, 1974-1983.

Чеховиана. Чехов: взгляд из XXI века. Ответственный ред. Катаев В.Б. Москва: Наука, 2011.

Чеховиана. Из века XX в XXI: итоги и ожидания. Ответственный ред. Чудаков А.П. Москва: Наука, 2007.

Karlinsky, Simon. Heim, Michael Henry. *Anton Chekhov's Life and Thought: Selected Letters and Commentaries*. Evanston: Northwestern University Press, 1997.

Phyllis, I. Lyons. *The Saga of Dazai Osamu: A Critical Study with Translations*. Stanford: Stanford University Press, 1985.

# Anton Chekhov and Dazai Osamu: A Journey from Siberia to Tsugaru

USSEN Botagoz

---

What Dazai Osamu and Anton Chekhov have in common—and what is often neglected in considering their relationship—is that each embarked on a journey that hugely influenced their literary activities. It was the mysterious journey to Sakhalin that Chekhov made, risking his life, and it was Dazai’s sentimental journey to Tsugaru that helped him to embrace his authentic Tsugaru-born nature. Although evidence shows that Dazai was well aware of Chekhov’s journey to Sakhalin, there is no clear evidence that Dazai’s decision to travel to Tsugaru was induced by Chekhov. Nevertheless, the products of these journeys—namely Dazai’s novel *Tsugaru* (1944) and Chekhov’s travelogue *Across Siberia* (1890)—share a number of contingent similarities. These similarities involve not only ethno-geographical or historical peculiarities of the two areas such as: climate conditions, cultural isolation, and linguistic idiosyncrasy, but also the narrators themselves: their feelings, impressions, and even their looks. Furthermore, what makes a comparative study of these works appealing is the fact that these contingent similarities were first discovered by Dazai himself. In his letter addressed to Kishi Yamaji, Dazai notes: “Last night I read Chekhov’s travelogue about Siberia. The people who appear there resemble people of Tsugaru so much. So much so that I sighed in surprise.”<sup>1</sup>

It is apparent that the central stories of both works revolve more around people, whom the narrators stumble upon during their journey, rather than “nature,” which they observe on the way. Postmen, sailors, migrants, convicts, clerks, exiles; it seems as though Chekhov is trying to compensate the description of Siberia’s gloomy monotonous nature with the vibrant medley of men and women, each of whom has different motives and reasons to reside in Siberia. Likewise, Dazai’s story unravels through his sentimental encounters with men and women of Tsugaru, friends and former servants at his house, each of whom plays a certain role in his search for the meaning of love.

Both Chekhov and Dazai were willing to perceive the reality of the places through the prism of local people. Such willingness stems primarily from the objectives that the two authors pursued during the journeys. While Dazai clearly states that his purpose in *Tsugaru* involves the pursuit of the “curriculum called love,” toward the end of Siberian journey Chekhov is fascinated with his discovery of “devil-may-care,” “seductive freedom” hidden in the Siberian taiga, thus insinuating

his original quest for freedom. Interestingly, both authors' objectives appear in somewhat paradoxical relationship with the destinations that they chose to pursue. Chekhov seeks freedom in the land of the unfree, whereas Dazai strives to learn the expression of love from the coarse and unlovable people of Tsugaru.

---

Notes

1. Dazai Osamu Zenshū v.12. Tokyo: Chikuma Shobō, 1999, 365.